N.river

ドロップ

水面の曲線は、あらがうことを忘れた穏やかさだ。
眺めていたら、映った白い雲が開いた穴のように、向こう側へとぼくを誘った。
出かけることは別段なれない準備の連続でもない。
去年の夏、汗と労力をつぎこんで作り上げたボトルシップをひとつ。それから、ここぞで役立つに違いない雨傘。着替えはお気に入りだけで十分だ。そして寂しさを感じたなら紛らわせるための彼女の写真。寂しさなら、腹も紛らわせるためのビスケット。飲み物は冷蔵庫に残っているソーダ水が丁度だろう。
それから……。
膨れ上がった麻のリュックを見下ろして、ぼくはしばらく考えた。
いいや、きっと必要なのはこれだと、絞ったリュックの口へ、最後に釣竿を刺し込む。
玄関を飛び出す直前、ドロップを口に含んだ。残りの缶を戻しかけて、無理やりポケットへ捻じ込む。
自然ともれる鼻歌は、水面の曲線とそっくりだ。

抗うことを忘れた穏やかなメロディー。
どちらに連れられ、どちらに導かれて、ぼくの足は自然と水辺へ向かう。やがてキラキラ光るそこに靴先を浸した。
温度だって悪くない。
匂いだって最高だ。
振り返る。
写真は持ってきたけれど、彼女にさよならを言っていなかったことを思い出して眉をひそめた。田舎の両親もだ。けれどどちらもしばらく会っていなかったなら、たいして重大なミスじゃないとうなずく。
少し日の傾いた水面には、白かった穴がオレンジ色で張り付いていた。その色は、穴が閉じてしまうまでのタイムリミットを告げている。
急げ。
慣れているからと準備に気をかけなかったからもしれない。時間は思ったより過ぎ去っていて、ぼくは少し慌てた。けれど慎重にならなければならないのは、ここからだ。
ぼくはリュックからボトルシップを取り出す。コルクの栓を抜いて、中の船が傾かないよう、そっと水面へ浸していった。まるで乾ききっていたかのように、ボトルは水を吸い

込んでゆく。やがてふわりと船も浮かび上がった。小さな船には幾ら穏やかでもそれだけで大波なのだ。くすぐったそうにも見える動きで揺れて動くと、ボトルの中で出航の足踏みを踏んでみせる。

見極め、ぼくはボトルをそっと後ろへ引いた。船は、その場に止まっていただけだけど、そのときから進み始めていたようだ。するり、ボトルの口から抜け出してゆく。

抜け出した船の帆に、赤く焼けた日は差した。

とたん風を受けたように帆はバン、と張る。

ぼくが縮んだ。

いや、そのとき船が大きくなったのかも。

水面は穏やかなまま。

そこに旅の足は堂々、浮かび上がってぼくを待つ。

ボトルの中の水を捨て、ぼくはポケットに捻じ込んだ缶からドロップを移しかえた。ほら、こうする方が中が見えて、いいだろう。何かの役に立つかもしれない缶をリュックへ戻し、担ぎ上げて船に乗り移る。

おっといけない。

空の端はもう、青味がかって夜のマントをなびかせている。水面に開いていた穴も、下

へ流され先ほどの場所とは違うところに開いていた。
さようなら。
心の中で呟く。
ぼくは用意されていたカイで、岸を押し出す。応えるように進む船が、水面に開く穴めがけて走り出した。
と、どこでどう聞きつけてきたのか、離れゆく岸へ彼女は駆けてくる。大きく振られた手には、夜のマント。彼女はその端を握り絞めていた。そうしてぼくへ懸命に叫んでいたようだけれども、もう聞こえない。ただその口元が動くさまだけを目にする。きっと見送りだから、ぼくはありがとうと叫んで返すことにした。夜のマントを振り続ける彼女を、小さく消え入るその瞬間まで見届けた。
その目で、帆を仰ぐ。
幾分、弱くなったけれど、オレンジの光を受けて帆は、まだまだ元気よく張っていた。証拠に舳先は真っ直ぐ穴へ向かって水面を裂いている。
ぼくはカイを置いて、舳先へ向かった。
今や穴はずいぶんすぼんで小さくなると、オレンジ色の縁をなぞって空気を、光を、歪めて吸い込んでいる。

いよいよだ。
見上げた帆は万全。
いまなら受けた光にまだ飛べる。
と船体が、穴の上へとせり出した。半分ほども進んだところでぐらり、穴の底へ傾いてゆく。
ぼくは目を見開き、船をしっかり両手で掴んだ。
落ちるという感覚なんてない。それは吸い込まれ歪み、流れるままに突き進む力だ。そうして穴へ潜りこんだなら、空がぼくの背後で青く変わった。
間一髪。
夜だ。
マントでふたされた穴はみるみる、閉じてゆく。
やがて回りに、先ほどと変わらぬ水面は広がった。時間だってほとんど同じだ。ただ少しばかり先を行っているのかもしれない。
彼女はあの後、真っ直ぐ家へ戻れただろうか。心配になって胸のポケットをまさぐった。携帯電話はあったけれど、その液晶画面が光る様子はない。
ぼくは安心することにして、マストの中ごろに吊り下げられた、たった一つの明かりを

つけた。眠る前に読書もいいけど、おなかだってすく。ボトルから残りのドロップを取り出して口に含んだ。その味はいつだって僕を興奮させるけど、まだ足りない。

ぼくはリュックから釣竿を取り出す。

これが夢だったんだ。

舳先に座り込んで、星の散らばる青い水面へ針を投げた。

何が釣れるだろう。

小さな小魚かもしれないし、一人じゃ食べきれないほどの大物かもしれない。ワクワクするのは部屋で出かける準備をしている時と、そっくりだ。

ぼくは待った。

すごく、待った。

そして、待ち続けた。

あれ。

目を覚ます。

最初に気づいたのは、釣竿がないことだった。そして次にようやく、待ちくたびれて眠ってしまっていたことに気づかされる。船から落ちなかったことだけが不思議なほどの幸運

で、何しろそれほどまでに船は揺れていた。
夜は明けているのだと思う。
けれどもそれすらわからないほど、空には黒い雲が覆いかぶさり、強く風は吹いていた。
帆が、千切れそうに張り詰めている。
嵐だ。
ぼくは慌てて船の中ほどに戻った。
おなかがすいて、グーと鳴ったけれど、それどころではない。慌ててリュックを開く。こんな時のためにと、傘を持って来たのだ。見つけて白いそれを抜き出した。マストを背に、両手で開く。
待ち受けていたかのように、大粒の雨は降り出していた。
船がうねる水面に合わせ、斜めと傾ぐ。
ぼくは転ばないよう傘を片手に座り込んだ。
雨はますます激しさを増し、船を、ぼくを、この水面をこれでもかと叩き続ける。慌てたりしたら思うツボだ。堪えてぼくは、ここぞとばかりリュックからソーダ水を取り出した。傘をさしているのだけれど、雨にびしょぬれになりながらすきっ腹へ流し込む。つまみ上げた指先から、湿気て溶けてゆきそうなビスケットもまた舐めた。その味になんだか急に

侘しくなってきて、涙がこぼれそうになる。実際、泣いていたかもしれないけれど、雨が酷くてそれはぼくにもわからなかった。

酷いもので、それでも雨は止んでくれない。

風もますます強くなる。

ぼくはぼくを押さえつけることだけで、精一杯になった。

飛ばされたリュックが倒れて口を開く。中からごろごろ、ドロップを収めたボトルは転がった。四角い缶ならこんなことにはならなかったハズなのに。ぼくは最後の食料に慌てて手を伸ばす。けれど、もう間に合わない。傘だって掴んでいなければならないからだ。

やがてうねった船の縁から、ボトルは跳ねて水面へ飛び込んでいった。

散々だ。

と、思った瞬間、頭上で鈍い音がする。

見上げたそこで、傘が破れて裏返った。

そのむこう見えた帆も、また弾け飛ぶように白い布を翻している。

その勢いに連れられてきたような大波が、唐突に船の中へと打ち上がった。

役に立たなくなった傘を投げ捨て、ぼくはリュックへしがみつく。

波に押し流された体が、ドンと船の縁にぶつかっていた。ぼくはずぶ濡れのままもう一

度、深い眠りにつく。

今度こそ、目が覚めた時の天気はよかった。

そんなに悪い事は続かないものだと思う。

流されてぶつけた体は少し痛かったけれど、天気がよければそれだけで最高だ。水面もいつもの穏やかさを取り戻すと、白い雲を映し出し、忘れていた鼻歌をぼくから引き出し始める。

きっと嵐がぼくに、ごめんなさいと言っていたのだろう。甲板には、打ち上げた大波と一緒に飛び込んできた魚が二匹、残されていた。おなかがすいていたぼくは早速それを料理して食べた。けれど問題はそれからだ。ぼくは帆を修理しなければならない。

そんなこと、初めてのぼくには不安だったけれど、マストに登ってすっかり破れてぶら下がったそれを。ぼくはどうにかくくり直してみせた。素人仕事のせいで、ずいぶん小さくなってしまったのが惜しいけど、どうにか形を整える。

そんな帆が不恰好なせいか。それからというもの嫌って風は、吹いてくれなかった。帆をまんぱんに張らせるあの光も、差しはしなかった。

ぼくはただ、途方に暮れる。

どうにか奮い立たせようと、リュックを開いて彼女の写真を探してみた。あの嵐に流されてしまったのか、写真はもうなくなっていて、ずいぶんとしぼんだリュックを前に、ぼくもまた酷くしぼんでうずくまる。

穏やかだけれど、水面は何も助けてくれない。

と、ぼくは不意にあることを思い出し、立ち上がった。

そうだ。

確か造ったハズである。

甲板の後方。

そこに跳ね板はあった。

駆け寄って、かかとでを甲板を踏み込んだ。板は驚いたように跳ね上がって、それをぼくはめくり上げる。

小さな金庫はそこにあった。

ぼくにその解錠番号は、お見通しだ。

右へ五つ、左へ七つ、行ったところで十戻る。

分厚い扉が、嵐を耐えて浮き上がる。

開けば、二つ折りのサイフは納められていて、ぼくは肩まで船底へ手を突っ込み、金庫

から掴み上げる。
開いて中を確かめた。
日はまだ高い。
そして嵐はまたここへ、いつやって来るかわからない。
ぼくは血眼になって右へ左へ、頭を振る。
岸は見当たらなかった。
けれどこう、考える。
そうだ、風だ。
風を買いに行こう。

夜のマントをたたんで彼女は、ふと、岸に流れ着いた一本のボトルに足を止めていた。心地よさげに浮かんだその中には、七色のドロップ。
拾い上げて、マントで水気を拭う。
コルクの栓を抜いた。
逆さにすれば、ボトルの底から剥がれて、たった一粒だけドロップは転がり落ちてくる。
口に含んだ。

甘い味が、喉を転がす。
漏れる鼻歌。
その調べは水面の穏やかさだ。
乗って彼女はこれまでにないほど確かと、家へ足を運んでゆく。
底でひとつに解け合った、ドロップのボトルを片手に。

N.river

Ｊｕｍｐ Ｊｕｎｋ．ｉｍｇ

流れるそれが川である、と気づくに視線は低く、目と鼻だけをのぞかせぼくは、水面《ミナモ》の鈍いうねりを見回す。

黒々と流れるそれは、ぼくの周りで幾筋もの尾を引いていた。引いて絡まり、ほぐれて合間に濁った泡を次々、吹かせる。

その勢いはぼくの息より数倍早い。

きっと口を開ければたちどころに、はらわたは流されてこの中にばらまかれるだろう。

ぼくは覚悟した。

つまりこの身はすでに、流されている。

そんなぼくに不安なんて中途半端なものはない。

ただ怖いだけだ。

だからぼくは手を伸ばす。

その手はぱしゃん、と音を立て、かろうじて流れを遮るけれど、たちまち互いを呼び合う流れは前より強く結び合って、僕の目の前でまた渦を巻く。ぼくは諦めず手を伸ばすけれ

ど、錆びた桃缶に触れるだけだったり、水底に突き刺さった自転車のハンドルをかすめるだけだったり、もう疲れ果てて一緒に木切れと流れてみたりするのが精一杯になっていた。

有様に、ぼくはもう続きはいらないよ、と呟く。

そうして知っていた。

それを閃きというらしいってことは、ずいぶん後から聞いた話だ。なによりぼくにはちっとも閃いた感じなんてなかったのだから、証拠にどちらでもかまわないこの目を閉じてみただけでもあった。

そうしてそのまま頭の先まで浸かってみる。

とたん流れは耳へ噛みつき、ぼくへ口を開けとそそのかした。けれどぼくは決して耳をかさない。逆立つ髪の先まで流れのままに、ただただくるくる水の中で回り続けた。

すると掴み損ねた桃缶が、ぼくの頬をなでてゆく。

帰って来たんだ。

何しろ違う桃缶だなんて、思えやしない。

だから錆が記号のようなそれを掴んで、ぼくはありがとう、と呼びかけ前へぐいっ、と突き出した。すると水底に突き刺さっていた自転車のハンドルは桃缶の中にすっぽり入って、ぼくははたまたぐいっ、と引き寄せにかかる。おかげでサドルの位置を探り当てるこ

とができたなら木切れは向こうからやってきて、ぼくがまたがったばかりの自転車へこれでもかとぶち当たった。
衝撃だ。
その振動がぼくの目を、一時、両方、開かせる。
桃缶もくわぁん、と鳴って行き先を告げ、叩き起こされ自転車が、驚き、突っ込んでいた泥の中から前輪を跳ね上げた。
ならそれは今度こそ、ぼくに訪れる。
怖いのは、掴もうとしたからだろ？
ぼくらは流れに乗ったのさ。
閃いたなら躊躇なんて、昨日の彼方だ。
ぼくはすかさずペダルを踏み込む。
巻きつく波を巻き返し、ぐいぐい、ペダルを回してやった。
そんなぼくが乗っているのは、長らく水底に突き刺さっていた自転車なのだから、周りにはいろんなものがぶら下がっているけれど、ぼくが漕ぐから自転車も懸命に息をする。
持ち上げた。
引きずった。

流れの底がどうん、と音を立てた。
ごわごわ、ゴミが舞い上がって、水の流れもやがてぼくらを押し上げ始める。
あわせてぼくは、重いハンドルを操った。
水面が近い。
見上げて初めて、その向こうに広がる世界を目に焼きつけた。空って、箱だ。そこには青い色が詰め込まれていて、ぼくはその隙間のなさに息を飲む。
飛び込むぞ。
決めたなら、桃缶の響きがぼくの両足へなお力を巡らせた。ぼくはぼくを忘れるほどにだ。ほどに、ペダルを回しに回した。
なら、ぼくと自転車は一心同体。
やがて水面をぬう、と割る。
さようなら。
押し上げてくれたみんなへぼくは、目配せを送る。そしてそうと決めたんだから、思いきり深く前掲姿勢を取りなおした。休んだりせず両足へ、今日一番の力を込める。
応える自転車が息を弾ませ、タイヤを回した。なら二つのタイヤは浮かび上がり、流れを切るとしゅうう、と水面を滑り走る。様子はミズスマシのようで、水面に伸びるわだち

の痕が本当に格好いい。
ぼくは見せつけ右へ左へ、これみよがしとハンドルを切った。なら自転車は、ほんの少しだけ触れていた水面からも、ついに浮き上がってみせる。
だからといってぼくが驚くことはない。
むしろ声はこう飛び出していた。
飛べ、飛べ。
嘘じゃないんだ。
ぼくが目を閉じたから、全ては底で繋がっただけのこと。
行け、行け。
箱の中から見下ろし初めて、それが川だと知っていた。
なんて大きな川だったんだ。
と、ふと心配はぼくの頭を過る。
青い箱を汚していやしないかな。
抜け出してきたばかりの体は少し臭くて、ぼくはくんくん鼻を鳴らした。
いいさ、で前へ向きなおる。
それはまた川へ戻るための印としよう。

何しろぼくはただ目を閉じただけに過ぎないのだから。自転車も、それがいいといろんなものをぶら下げている。

N.river

アンドロイド

　ぼくの部屋にアンドロイドがやってきた。一メートル四方の段ボールに梱包されて二人がかり、宅配のお兄さんがボロアパートの階段を登って、二階のここまで運び入れてくれたのだ。
「重いですねぇ、何が入っているんですか？」
　苦笑いでたずねるお兄さんは、こんな貧相な部屋に住むぼくがアンドロイドを購入したなど、微塵たりとも思っていない様子だ。そりゃあそうだろう。送り主の欄には誰も知らないような会社名が書かれていたし、内容もまた「精密機械」と表記されたきりときている。それにアンドロイドといえば購入後の維持費にメンテナンス代も安くない金持ちの、それも成金のステイタスシンボルなのだから仕方ない。
「新しいパソコンです。仕事に使うための特注品で」
　ぼくは誤解を解くのが面倒で、答えて受け取りのサインを済ませる。
「そうでしたか。毎度ご利用、ありがとうございました」
　かぶっていたキャップを脱いだお兄さんの一礼は、一仕事終えたせいか、妙に晴れ晴れ

して見えていた。なんだかぼくまで満たされて、階段を降りゆくその背を見送り続ける。
いや待てよ、と我に返った。お兄さんには悪いけど、メインディッシュはこれじゃない。今しがた狭い部屋の真ん中にでん、と据え置かれたアレだ。
目がけてぼくは身を翻す。
畳なのだからつい正座してしまうけれど、今日は人生の記念日にすらなりそうなのだから、かしこまるのもちょうどだろう。そうして改め、段ボール箱を観察した。
うん。何の変哲もないごくシンプルな段ボール箱だ。静電気防止とか、衝撃緩和の何かだとか、ついている様子もない。ただ側面に社名とロゴは印刷されると、上部にガムテープが貼られて封されているだけだった。この調子なら中には洗濯機でも入っていそうで、そんなことが起きれば一大事だとぼくは一人、苦笑してみる。
ならそのときから胸は高鳴りだしたらしい。相手が人の形をしている、ということもあるだろう。アンドロイドだろうと「初対面」なら、ぼくは緊張を覚える。果たしてどんな顔をして、どんなスタイルの、どんな声を出す、どんな性格のアンドロイドなのか。期待と不安がおしくらまんじゅうで、ぼくの鼓動を早めていった。
もちろんそれら設定は、後からいくらでも好みに合わせることが可能である。けれど最初から好きに調節してしまうなんて、ぼくには乱暴で醍醐味に欠ける行為だとしか思えな

かった。だからぼくは最初のうちだけでも、初期設定で楽しむことを決めている。それがまた期待と不安へ拍車をかけた。

ままに、箱へと手を伸ばす。

ガムテープの端を爪で剥がした。

つまんで一気に引き剥がす。

けたたましい音は鳴って、箱の口がわずか開いて浮き上がった。

そうそう、断っておくならぼくがアンドロイドを注文した理由にいかがわしいものは含まれていない。証拠に性別はメーカー任せだ。そんなぼくは労働力にも、話し相手にも不便していない。それでも高価なアンドロイドを購入したわけを明かすなら、「憧れ」の一言に尽きた。バイクや車、旅行にブランド物と同じだよ、と言えば分かってもらえるだろうか。手に入れるため組んだローンも、返済のため汗水たらして働くことも、ありふれた話だと思っている。

のぞき込んだ段ボール箱のフタには、そんなぼくの影が落ちていた。

払いのけるようにして、ぼくはそこへ手をかける。

いよいよだ。

意を決し、期待のまま左右へ開いた。

とたん「あ」と声は出そうになる。

髪の毛だ。

黒いそれが、詰め込まれた発泡スチロールの中にのぞいていた。つむじがあるから、頭の天辺あたりで間違いない。もう自分のものなのだから触れてもかまわないはずが、いささか抵抗を覚えてぼくは眺める。これは男のつむじなのか、女のつむじなのか、しばし考えを巡らせた。分かるはずもないなら諦めうーん、と声を上げる。

何しろここに頭が見えているということは、箱の大きさから察してアンドロイドは三角座りか、でなければ正座でもして梱包されているはずだった。ならついさっき宅配のお兄さんが二人がかりで運び入れた通り、それを一人で引っ張り出せる道理がない。

段ボール箱を切り開くしかないのか、と考える。損じて、中のアンドロイドを傷つけてしまえばもう、立ち直れそうな気がしなかった。だが他に手段は思いつかず、ぼくはナイフを取りに向かう。

はずが、泳がせた目にそれは映った。開いたふたの内側だ。予見していたように、アンドロイドの取り出し方は図解で印刷されていた。

従い箱の角から、ぼくは飛び出したビニールのヒモを見つけ出す。手順とおり下方へ引いた。ならバリバリと音はして、箱に裂け目は走ってゆく。次の瞬間フワリ、箱は四方へ

展開した。中に詰め込まれていた発泡スチロールがどうっと畳へあふれ出す。案の定、アンドロイドはヒザを抱えてそこから姿を現していた。

青いプリーツスカートに、白いブラウスが清潔感たっぷりだ。部屋で開封されることを考慮してか、靴は履かされていない。うつむき加減の顔へ伸びた髪がかかっていた。そうして振り分けられた髪にうなじが白くのぞいている。

女の子だ。

これはすごいぞ。

もう興奮が押さえ切れない。ぼくは発泡スチロールをかき分ける。すぐさま彼女のそばへ這い寄った。発泡スチロールは肩や腰の辺りにまだ残っていて、掘り返すようにぼくはそれらを払いのける。おかげで落ち着きを取り戻せたようだ。そこで一度、ぼくは身を引いた。アンドロイドの全身を見回す。後ろへと回った。また前へ戻って意を決する。そうっとでないと落ち着けはしない。ぼくはアンドロイドの顔をのぞきこんだ。

やはり作り物っぽさは拭えない。けれどそれは肌の質感だけのことで、眉毛にまつ毛は本物そっくりと植えつけられていた。唇など、わずか湿ったように光ってさえいる。その上に開いた小鼻は今にも膨らみ、最初のひと息を吸い込みそうで、これは油断ならないなとぼくをなぜか警戒させた。そんなことより何より驚かされたのは、そうまで近づいたと

ころで新品の工業製品につきものの機械臭が全くしなかったことだろう。
なんて完璧なんだ。
近づきすぎた顔をぼくは引っ込める。
それでも不自然な点を挙げるとすれば、今だ微動だにしていないことくらいだろうか。いや、それもこれも配送の都合で、確かスタートアップはお客様自身で行ってください、という文言も注文時に読んでいたはずだった。もちろん、それこそがぼくでもどうにか購入できる価格の秘密で、飲み込んだなら眺めていても始まらない、とぼくは思う。
よし、スタートアップだ。
唱えるままに、ぼくは発泡スチロールの中へ手をもぐり込ませた。指に振れた取扱説明書を拾い上げる。なら、さすがハイテクノロジー商品というべきだ。自律する予定にあるそれの説明書は、パソコンなどとは比べものにならないほども薄かった。おかげですぐにも作業へ入れそうで、意気込み勇んでぼくは表紙をめくる。
きっと本体のどこかに、スイッチはあるはずで、通電したなら各ソフトにアプリケーションをインストールさせてゆくに違いない。手順を、何の根拠もないまま想像してみる。
完了まで一体、どれくらいの時間がかかるのか。初めてのことだけに見当はつかず、もし、つきっきりで作業しなければならないのであれば今のうちアルバイト先へ休む旨を伝

えておいた方がいいかもしれない、と思いついていた。だがお手入れの方法だの、水に濡れたら、なんて項目が続いたところで、肝心の起動手順は出てこない。

まさか。

ひそめた眉で、ぼくはとにかく文字を追う。だが薄いのだから、読み進める文字などあっという間に尽きていた。気づけばもう最後一枚だ。嘘だろう、と罵るままに、ぼくはその一枚を裏返す。と、それは一番下に、たった一行、書かれていた。

なお当製品は「生きている」というお客様の感情移入完了直後より、起動いたします。

だまされた、なんてぼくは思っていない。ハイテクノロジーは時に魔法を彷彿とさせるものだ、と聞いている。それほどまでにこのアンドロイドは高価でもあったのだ。

だからしてその日から、彼女へ話しかけることがぼくの日課になった。最近ではようやく彼女が人間だ、と思えてきた様子である。なぜなら彼女はときおりぼくへ、笑いかけるようになっていた。良い兆しだ。全起動の日も近い。そのためにも手抜きは敵だ。今朝も優しく話しかけてから、ぼくは仕事へと向かう。

サンタはいない

ぼくはサンタに捕まっていた。
「ほんとにサンタなの？」
けれどサンタはトナカイのソリなんかに乗っていなくて、四つの車輪がついた四角い車に乗っている。その運転席でブーツまで脱いじゃって、臭い足を絡めてダッシュボードに乗っけていた。
「ああ、そうだよ」
疑うぼくへ、着ているコートを引っ張ってみせる。
「赤いだろ？　で、ここ、白いだろ？」
でもやっぱり白いおひげはついていなくて、ぼくは隣の席でうつむいた。
「……おじいちゃん、じゃないもん」
結んだ口で言ってやる。
「それはほっときゃそのうちなるから、心配するな」
言うサンタはなんだか適当だ。それでも次々に指さして、サンタは最後、ぼくに頭へ乗っ

けた帽子をぐい、と見せつける。
「けどこの色とコートと、そら、三角帽子は間違いないだろ。これはこの時期にしか着ないし、今夜はお届け物をするって仕事が山ほどある。年末は忙しいんだよ。どうだ。サンタ以外に考えられない取り合わせだろう」
仕方がないからぼくはサンタへ顔を上げて、嫌々確かめ、また自分の足へ目をやった。
そんな僕の様子にサンタはなんだか諦めたみたいだ。前へ向き直ると運転席の中へずる、と沈みこんでゆく。三角の帽子を顔の上へ乗せかえてから胸の上で腕を組んだ。
「で、なんで、こんな夜中にボクみたいなちっさな子が外を歩いてんの？」
ちょっと黙り込んでから、ぼくへ話しかけてくる。ぼくはそんなサンタにもっとずっと、ぎゅっと口を結んで、眉も結び返してやった。
「なんでかな？」
けれどサンタはしつこくて、今度はぼくが諦める。
「ママが」
「ふん」
「ママが、サンタはいないって言うから」
ならサンタは少し驚いたみたいだ。顔に乗っけた帽子のすみっこから、びっくりした目

でぼくを見る。本物なのにおかしいの。だからぼくはもう一度、サンタに聞いてやることにした。

「ねえ、ほんとにほんとのサンタなの？」

サンタはすぐに答えてくれず、顔の上から帽子を取る。それからぼくの前で、おひげのない口をムズムズさせた。じれったいのは嫌だから、僕はもう一度、サンタへ向かって言ってやる。

「おひげはないけど赤いコートで三角帽子で、今夜はたくさんのお届け物があるから、本当のサンタなんだよね？」

嘘だったら、ぼくは絶対、許してやらない。

するとサンタは目をぐうう、と大きく開いてみせた。じいっと返事を待つぼくに、その目でにいっ、と笑いかけてくる。

何だかやっぱりサンタっぽくないと思うけど、ぼくは返事がくるまで決めつけたりしないんだ。だからサンタも放り上げていた足を降ろしてブーツを履いた。車輪のついたトナカイから振り落されないよう、体へベルトを巻き付け始める。

「ようしボク、サンタの仕事ぶりを見てみるかっ？」

本物かどうか知りたかったから、ぼくはすぐにうん、と答えて返していた。ならサンタ

はぼくにもベルトをしろと言って、トナカイにムチを入れる。入れて前を睨み付けた。
「サンタはな、いつだってみんなが一番、欲しいものを知っている。そしてそいつを見事、届けるからサンタと呼ばれるんだ」
　その通りだ。
「だからボクのママにも今一番、欲しがってるものを届けて、サンタがいるってことを証明してやる。いないとはもう、言わせない」
　と、トナカイのお鼻は光って、目の前がまあるく白く浮き上がった。ぼくはその提案に、わあ、と大きな声を上げて、そんなぼくへ帽子をかぶりなおしたサンタは、またあの笑顔で振り返る。
「そら、ボクの家はどっちだ？　案内しろ。ママはきっと心配してる。家へ大事なボクを届けてやるさ」
　トナカイには荷物を担いで走る昔の人のマークが貼りついていたけれど、揺られてタイヤの音を聞きながら、飛び出してきただけの道を辿って家を目指す。
　メリークリスマス。
　ママに言ってあげるために。
　きっとママだってサンタはいるって、信じてくれる。

だって、メリークリスマス。
ぼくは今夜、サンタといる。

まだ、言えてない。

ええっと、と詰まって彼は、所在なさげに頭を掻いた。
わたしは言葉の続きを読み取ろうと、彼の顔へ目を凝らす。けれどさっぱり見当はつかなかった。
「ええっと。実は」
散歩がてら歩くここは、近所で一番大きい公園だ。外から見れば森のようで、茂る木々は今、季節の変わり目を告げると黄色く色づき、はらはら散って足元をすっかり秋の色へ変えている。
踏みしめ歩く彼はまだ「実は」の続きを口にしてない。

そんな彼と出会ったのは、ちょうど一年前だ。わたしがまだ専門学校へ通っていて、駅前のファーストフード店でアルバイトをしていた時だった。朝、決って同じ時間に訪れる彼は、必ず同じメニューを注文していて、そのワンパターンが「彼」を覚えた理由になる。
にもかかわらず、いつも少し吟味してから注文する彼は、店に通い詰めていることを悟

られたくなかったのだと思う。そしてアルバイトの店員が、日に何十人と接するお客の顔や注文を覚えているはずがないと、タカをくくっているに違いなかった。でなければ毎回、ああもわざとらしい芝居を打ったりするなんて、私なら恥ずかしくてできはしない。

けれど案外、店員はお客の顔や注文を覚えていて、だからあの日、わたしは先回りすると、迷う彼の注文をみごと言い当ててやったのだ。

その時の、彼のバツの悪そうな顔は今でも忘れられない。

けれど、それがよかったのだと思う。

それから彼は無駄な芝居を打たなくなったし、そしてわたしたちはその分、阿吽の呼吸で仲良くなった。

そうそう、あまりに毎回、同じメニューを注文するものだから、一度、軽い気持ちで新商品を勧めたことがある。あの時、妙に機嫌を悪くした彼は意外すぎて、そんなに酷いことをしたかしらと首をひねったものだった。

そんな彼とわたしがおつきあいする事になったのは、わたしがついに卒業を迎え、アルバイトを辞めることになった半年前のことだ。でも言い出したのがどっちだったのか、よく覚えていない。ただその日もいつものように顔を合わせて、今日が最後なら仕事が終わる頃にまた来るよ、と彼が提案してくれたことだけはよく覚えている。

落ち合って、お店でそのままフライドポテトとコーラを平らげたのは、今思えば本当に滑稽なお疲れ様会だった。けれどそのとき初めてお客と店員を離れると、これからどうするの？　と聞かれ、何のお仕事をしているんですか、なんて尋ねることが出来ている。名前もフルネームで知ったのは、その時が初めてだった。

朝、時間通りに食事をとる彼なのだから、そもそもその生活は不真面目だとかだらしがない、なんて人ではないと思っている。きっと会社勤めだ。そう予想していたけれど、わたしが福祉関係へ進みますと教えたところで、彼はすごいな、応援するよ、と言ったきりで、最後までわたしの質問に答えてくれることはなかった。

今、思えばその「応援するよ」が「つきあってください」だったのかもしれなくて、確かにそれからわたしは慣れない仕事にくじけそうになると彼を頼ったし、半年ほどが過ぎてどうにか仕事に慣れ始めた頃には、いつしか時間を作ってさえ会うようになっていた。

落ち葉がはらり、と彼の肩をかすめ落ちてゆく。

誘われたように、そこで彼の足は止まっていた。

「実は」の続きはもしかすると、あの時、聞けなかった勤め先の話なのかもしれない、とわたしは考える。それとも今さら「つきあってください」とでも言うつもりか。いやもしか

すると文言の前に「結婚を前提に」なんてつけようとするから、こうも歯切れが悪いのかも、と一人、考え、緊張してみる。

そんな彼の目がわたしをとらえていた。口はやがてこう動く。

「実は、ぼく、死神が仕事なんだ。君をさらいに、店へ通ってた」

またはらり、赤く焼けた葉が彼の背で舞い落ちていた。

「けど君は、死んでしまうには、なんだかもったいない。なんだか、って曖昧だけど、それが一番、正しい答えだから問わないでほしい。この仕事をやっていると、そういう良し悪しの見分けが自然とできるようになってくるんだ。だからのらりくらり先伸ばしてきた。上には見極めている途中だ、ってうそぶいてね」

悪戯気に眉を跳ね上げてみせる。

「何を、言ってるの？」

「それも、もうバレた。すぐにも帰れと指示されてる」

そのもっともらしい口ぶりが、もっともわたしに伝わってこない。ままに瞬いた瞬間だった。風は強く吹き上がり、風にざざざ、と木々がざわめく。とたん散っていた落ち葉は足元から舞い上がって、わたしの目の前をひと思いに赤と黄で染め上げた。

「目が覚めても、驚かないで」

声は聞こえるけれど、彼の姿がよく見えない。
「待って！　そんなの嘘でしょ」
まだ手しかつなげていないのに。
「どんな君でも、君のままで生きていて欲しい。でないとぼくは丸損だ」
ようやく見えた落ち葉の隙間から、言う彼の体は冗談のように浮き上がってゆく。吹き上がる落ち葉と共に飛び去るべく、これでもかとシャツをはためかせていた。
「そんな、急にさよならなんて！」
はしたないけど、言わずにおれない。
「その前に、一度くらいキスしてよ」
「それこそできないよ」
言う彼は困ったように笑んでいた。
「そんなことをしたら本当に、君は死んでしまうから」
彼が飛んだのではないと思う。
とたんわたしの足元は抜けていた。
声は出ず、それきり果てへ落ちてゆく。
闇は深い。

さようならも、言えていない。

機械の音。

目が覚めた、と感じ取っていた。

その視界へ、やおらお母さんの顔は突き出されてくる。瞬間、私の名前を何度も呼ぶと、しがみつくなり泣きだした。繰り返す「よかった。よかった」は、あんまりにも大袈裟で「もう、やだ」とわたしは思わずお母さんへ手を伸ばす。

手を、伸ばした。

押しのけようと右の手を、伸ばしたはずだった。

その手が、いや、わたしの体の半分が動かなくなってしまったことは、次の朝、とても丁寧にお医者さんから聞かされた。

わたしは就職なんてしていない。アルバイトを辞めたあの日、迂闊な運転手の車にはねられ、この病院へ運び込まれただけだった。それから半年間、眠り続けたままでこの病院にずっといる。

理解はできた。

だってそもそも死神なんているはずがない。
全ては夢だ。
けれど口はうまく動かず、ご飯すら食べづらくて、歩けないうえ椅子へも満足に座ることができず、今の方が夢みたいだった。何をするにも人の手が必要で、何もかもがうまくいかず、辛くて頭がおかしくなりそうになる。そんな今の方がずっと死神に憑りつかれていて、いっそ死のうと睨み付けた天井へ毎晩、誓った。
けれどできなかったのは、不自由な体のせいではない。

どんな君でも、君のままで生きて欲しい。
でないとぼくは、丸損だ

彼の顔は浮かぶと声が蘇る。応援するよ、と言われて頼ったあの日々が、閉じたまぶたを覆って目の前で踊り続けた。夢の中の、それは起きてやしないことだらけだけど、忘れられないなら強烈に、強烈に、白々しい芝居を続ける彼に会いたくなってくる。
死神なんでしょ。とっとと迎えに来なさいよ。
罵っていた。

丸損なのはこっちよ、ばか。
なじる。
もしあの時、一緒に連れて行ってくれたなら、目覚めることなく死ねたのか。
考え続け、まさか夢の中で出会った人物が、本当に命を奪うなんてありえないと落胆した。けれど会いたくて、だから会えるはずもなくて、涙の味さえ分からなくなるほど泣き続ける。
いや彼は間違いなく本物の死神だ。
そう思い始めたのは、そんな涙も底を尽きようとした頃だった。だからこそ生死の淵をさまよっていた夢の中でしか会えなかったんだ、と思う。なら必ずまた会えるじゃないか。気づけたのは、今、生きているからだろう。
そう、生きている限りだった。
生きている限り必ずいつか人は死ぬ。
もしかしたらその時、もう一度、彼に会えるかもしれなかった。いやたとえ違う誰かが迎えに来ても、ちゃんと彼が来るまで死んではやらないと、考える。そしてそのとき今度こそ、し損じたりしないと心を決めた。今度こそ、こちらからその襟首を掴んでキスしてやるんだ、と開いた両目で天井を睨む。

それからさようならを言えばいい。
その日までを、何が何でもわたしは生きる。
もう一度、彼に会うためその日まで、何が何でも生き続けるんだと心に決めた。

落ち葉の季節がまた廻ろうとしている。
励むリハビリのせいでだいぶと力の戻った右手はきっと、掴んだ襟首を離しはしないだろう。
わたしは強くなった。
きっともっと、強くなる。

そしてさようならはまだ、言えてない。